

令和7年度 S特選コース

第2回 入学試験問題 (2月2日 午後)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、原寸大の模型をつくる。
- 2、彼の帰国は再来月だ。
- 3、彼の技術が一枚上手である。
- 4、大臣の去就が報道される。
- 5、お宮にお札を納める。
- 6、センレンされた服装。
- 7、ハクガクを競う。
- 8、ケンブンを広める。
- 9、新制度にイコウする。
- 10、文豪にシジして教えを受けた。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「山下理佐」は、短大の入学金を婚約者に渡してしまった母親との訣別を決め、小学生の妹「律」を連れて、単身家を出た。
見つけた仕事場は、水車小屋のある山間の蕎麦屋。そして、姉妹二人だけの、つつましい日々が始まった。ようやく生活が落ち着き始めた矢
先、母と婚約者が妹の小学校に乗り込んできて……。

二種類の廊下を歩いてくる音が聞こえてきて、うつむいていた理佐は顔を上げる。すたすたとした子供の軽い足取りを、大人が追ってきている
ようだった。山下さん！ と、おそらく保健室の先生に呼ばれながら、律は何のためらいもなく教室の戸を開けた。

「何しに来たの？」

「それが母親に言う言葉か？」

母親の婚約者が、律に向かって言う。律は無言でそちらを見た後、聞きましたかともいうように、藤沢先生と、律を追ってやってきた保健室の先生を振り返る。

「律、りっちゃん。帰ろう」

「なんで？」

教室の戸口に立った律は、母親の湿った呼び声に A 反応を返す。

「帰ったら私その人に顔つきが気に入らないってだけで怒鳴られるし、夜に出ていけって外に出されたりするもん。お母さんはそれを止めないし」
律がそう言うと、母親の顔色がさっと赤く変わった。

「そんなうそを言って恥をかかせるようなこと言わないで」

「うそじゃない。おねえちゃんが、一緒に来る？　って言ってくれたのは、その人に家を追い出されて、夜遅くに外にいたのを、おねえちゃんが見つけてくれた時のことだったもの」

母親の婚約者は、あれはおまえが本当に聞き分けがなくてふてくされてたからだ、と実体のないことを言う。

「貧乏でもいいの？」顔色の変わった母親は、声をうわずらせて律に向かって身を乗り出す。「このままじゃろくな人生を送れない。高校にだつて行けないかもしれない」

「公立高校ならおそろく行けますよ？」

藤沢先生が口を挟むと、母親は、律に向かって身を乗り出したまま、^① 信じられない、という顔でそちらを見遣る。藤沢先生は、表情を変えないまま、母親とその婚約者を見つめている。

「お金が欲しいから私たちに帰ってきて欲しいんだよね？」

理佐の言葉に、母親は、違う、と反論する。母親の婚約者は、何も言わずに腕を組んでじっとしているだけだった。

「連れ戻して、私たちがお金をもらえる手続きをしたら、それで用事は済んだって感じで扱う？　私はそれでもまた出ていけるけど、律はどうする？」

そこにいる全員が息をひそめていた。正解はないのではないか、と理佐は思った。本当は、母親がその男と別れて律を連れ戻して一緒に暮らすのがいちばん良いはずなのだけれども、母親にそうするつもりがないのなら、^② 正解はないのだ。

「お金の手続きには付き合う。でもお母さんの所には戻らない。お母さんがその人と生きたいんなら、私は律と生きる。これまでどおり、暮らせるだけ二人で暮らす。どうしても難しくて、私が律にろくでもない暮らししかさせてあげられないんなら、お父さんの親戚の人か、役場に相談する」

教室の戸口に立っている律が、ゆっくりとうなずくのが見えた。

「律さんの生活が、お姉さんということで著しく小学生として損なわれるようなことがあると判断すれば、私たちはしるべき場所に報告します、そのことを高学年の担任や、中学の先生とも共有します」

藤沢先生の声が聞こえた。「中学」という言葉を、自分が何か^③明日の仕事のように、確実に受け止めなければいけない物事として聞いていることに、理佐は気が付いた。自分は明日、水車小屋でそばの実の袋を運んで、再来月ぐらいにはストーブを買うように、数年後、律を中学に行かせる。

そして、さつき藤沢先生が言ったように、いつかは高校にも行かせるのかもしれない。もちろん実感はなかったけれども、これまでの律との暮らしを思い出すと、それは絶対に不可能なことというわけではないように理佐には思えた。

「金は」母親の婚約者は、腕組みをしたまま顎^{あご}を上げて理佐を見た。「どうなるんだ」

「私たちを追わないでいてくれるんなら、私の分はあげる」

理佐はじつと母親の婚約者の目を見上げて、それから母親の顔を見る。老けたな、と思った。父親と別れてから、苦勞して自分たちを育てたのは知っている。だから今になって男に寄りかかりたくなつたのかもしれない。それはもう本能なんだと言われたら、自分は否定はしない、と理佐は思う。でもその男のやることを制御できないで、律の人生を巻き込んでしまうことは間違っている。

「律の分は、律が私の年齢になるまで手を付けないで。どう使うかは、本人に決める権利があるから」

理佐の言葉に、俺はそれでいいけど、と言って、母親の婚約者は隣にいる理佐の母親を見る。母親は、あなたがそれでいいんなら、と呟^{つぶや}くように言う。^④本当に悲しい、という言葉で、理佐は呑み込んだ。それでも自分は、毎日やれることをやって、手元に残つたもので生きていくしかないのだと理佐は思った。

そしてそれは、少なくとも悲しいことではなかった。

母親とその婚約者を帰した後、藤沢先生は理佐に向かつて、本当にこれで良かったのかとも思います、と言った。理佐はうつむいていた。

「私はこのことを後悔しないために、あなたたち姉妹のことをこれからも見守らせていただきます。わずらわしいかもしれませんが、そのつもりで」

藤沢先生の口調は静かだったが、動かしがたい決意に満ちていた。

藤沢先生の言葉にうなずきながら、いろんな大人がいる、と理佐は思った。^(注)浪子さんや守さんや杉子さんのことも思い出しながら、彼らに寄りかかるのではないけれども、それぞれをその場で頼りにしてやっていかなければ、と思った。

帰り道で理佐は、ごめんなさい、と律に言った。律は、お姉ちゃんがあやまってしまふ気持ちはなんとなくわかるけれども、べつにそんなことは何もないんじゃないの、と理佐を見上げた。

「りっちゃんをお母さんのところに帰せるような状態にしてくれて、お母さんを説得することができなかった」

その人と別れて、って言えなかった、と理佐が言う、律は、うーんと唸^{うな}って大きく首を傾^{かし}げて、少し考えるようなそぶりをする。本当に考えている様子だったけれども、どこかのんきな仕草でもあった。

「お母さんにもお母さんの人生があるってことなんだよ。そう思うしかないよ」

「でも、それはりっちゃんを私の年齢ぐらいまで育てるまで我慢すべきでしょ」

「私が十八になるぐらいってことは、お母さんは五十歳過ぎてるわけだし、それじゃ遅いって思ったんじゃないの」

「貧乏でもいいの？　なんて言われるし」

でもそれは本当のことなんだ、と理佐は頭の中でだけ付け加える。律に打ち明けてしまうと、そのことが自分たちの人生を更に呪^のうような気がした。

「貧乏が怖い、わかるよ」

律は夜空を見上げながら言った。右を見たり左を見たりしているので、おそらく星座を探しているのだろうと理佐は思う。

「学校の意地悪な男子は、ものすごく貧乏をばかにするからね。だから怖いのはわかる。でも私の読んでいる本に出てくる人は、貧乏な人が多い。私も例外じゃないのかもしれない」

そういう連中にはかにされない生活をしてるからって幸せだとは限らないし、ばかにする連中が幸せだとも思わない。

律が付け加えるのを聞きながら、理佐は、夏の終わりの空気を胸一杯に吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。

「りっちゃんが、私と暮らすのがもういやだと思ったら、いつ出て行ってもいいから。藤沢先生か、その次の先生か誰かに言って」

「わかった」

「わたしは親戚全員にでも頭を下げてなんとかするから」

「わかってるよ」

律は理佐の手を取り、一瞬だけぎゅっと握ってすぐに離れた。そして、もう片方の手で東側の山脈の影の上を指さす。

「あれがたぶんアルビレオだ、はくちよう座の。^⑤肉眼で見ると一つに見えるけど、望遠鏡で見ると二つあって、二重星っていうんだって。金色と青色の星でできてるんだって」

理佐はそちらに向かってまばたきしながら、律の指の先に目を凝らした。

(注1)「お金が欲しいから私たちに帰ってきて欲しい」……「理佐」の父親が他界し、遺産の一部が「理佐」と「律」の手に渡ることになった。

その遺産めあてに、母親と婚約者が「帰ってきて欲しい」と言っているのではないかと
いうこと。

(注2)「浪子さんや守さんや杉子さん」……浪子さんと守さんは、「理佐」が働く蕎麦屋のオーナー夫婦。杉子さんは、近所に住ん

でいる絵描き。

問 一、
A にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、激高^{げきこう}した イ、冷めた ウ、ささくれだった エ、おかどちがいな オ、のんきな カ、不思議そう

問 二、——線①「信じられない、という顔でそちらを見遣る」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当でないものを次から一つ
選び、記号で答えなさい。

- ア、同じ大人である娘の担任が、現実^{現実}に横たわる問題を意に介さない発言をしたから。
イ、部外者である教員が、家族間の問題に容赦^{ようしや}なく首を突っ込んできたから。
ウ、金銭上問題があっても、高校に通えることは寝耳に水の話だったから。
エ、自分に同調してくれると思っていた娘の担任が、予想に反する見解を示したから。

問 三、——線②「正解はないのだ」とありますが、「理佐」がそのように考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、母親が婚約者と別れない以上、どうあっても「理佐」の思い描く親子の関係性は手に入らないから。

イ、母親が婚約者の命令に従う以上、今後も「律」と婚約者の関係性に変化はないから。

ウ、母親が婚約者と対等な関係にならない以上、「理佐」と「律」には今後も心穏やかな日々は訪れないから。

エ、母親と婚約者だけの世界が出来上がっている以上、「理佐」と「律」の入り込む余地はもはやないから。

問 四、——線③「明日の仕事のように」とありますが、これはどのようなことをたとえた表現ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「律」と一緒に生活していく覚悟を決めなければならない瞬間だったということ。

イ、「律」との暮らしが経済面で苦しくなることが決定づけられたということ。

ウ、「律」を「中学」に行かせることが急に現実味を帯びてきたということ。

エ、「律」を大きくするまで育てることが、義務として課せられているということ。

問 五、——線④「本当に悲しい、という言葉を、理佐は呑み込んだ」とありますが、「理佐」は何に対してこのような気持ちになったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、我が子の行く末を案じるよりも、婚約者の意向を優先させる母親の姿。

イ、我が子に入って来るお金の行く末にしか心が動かない母親の価値観。

ウ、我が子の前でも、臆^{おく}することなく、婚約者に媚^こびる母親の姿。

エ、我が子との生活よりも、婚約者との生活を選んだ母親の生き方。

問 六、――線⑤「肉眼で見ると一つに見えるけど、望遠鏡で見ると二つあって、二重星っていうんだって」とありますが、「はくちよう座」の「アルビレオ」が暗示しているのはどのようなことですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、指定された字数でそれぞれ考えて答えなさい。

1、五字以内

が

2、十字以上十五字以内

ということ。

問 七、「理佐」がひさびさに顔を合わせた「母親」に対して、新たな気づきを得ている部分があります。その部分を文章中から一文で探し、最初の三字を抜き出して答えなさい。

問 八、この文章の中で描かれている人物像として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、母親は、「理佐」と「律」を気にかけるそぶりはあるものの、ほぼ婚約者の言いなりの状態である。

イ、母親の婚約者は、「理佐」と「律」に思い入れはほとんどなく、あるのは金銭面への執着のみである。

ウ、「藤沢先生」は、「理佐」と「律」の今後を案じながらも、責任を持って温かく見守ろうと決意している。

エ、「理佐」は、自らの意志で「律」を連れて出てきたことに、いくぶんの後ろめたさを感じている。

オ、「律」は、幼いながらも強気にふるまい、家計を支えてくれている「理佐」に恩義を感じている。

問 九、この文章の表現上の特徴として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、「母親」という表現を盛り込むことにより、「理佐」と「母親」との一定の心の距離が暗示される形になっている。

イ、会話を多く用いることにより、登場人物同士の応酬から、各人の心情の起伏が、より鮮明に伝わる形になっている。

ウ、「母親」の婚約者を、定型の悪役に配することにより、読者がストーリーの展開を追いやすい形になっている。

エ、主に「理佐」の視点から描かれることによって、「理佐」が思い描く家族の在るべき姿が透けて見える形になっている。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

「進化」という言葉はいろいろな分野で少し違った意味で使われていますが、ここでの「進化」は生物学的な進化を指します。すなわち、ダーウィンが述べた「多様性を持つ集団が自然選択を受けることによって起こる現象」のことです。

この進化の原理はとても単純です。まず、生物は同じ種であっても個体ごとに少しずつ遺伝子が違っていて、その能力にも少しだけ違いがあること、つまり能力に多様性があることを前提とします。

(中略)

子孫を残しやすい性質が集団内で増えていく現象が「自然選択」と呼ばれます。多様性があつてそこに自然選択が働くと、より子孫を残しやすい性質がその生物集団に自然に広がっていくことになります。

このように集団の性質がどんどん変わっていくことが生物学的な「進化」と呼ばれます。自然選択が起こると特定の性質が選ばれるので、一時的に多様性は小さくなっていますが、そのうち遺伝子に突然変異が起きてまたいろいろ性質の違う個体が生まれると多様性は回復します。そしてまた自然選択が起こり、進化が続いていくことになります。

(中略)

進化が起こるためには前提として「増える」という性質と「子孫に性質が遺伝する」という2つの条件が必要になります。そしてこれはただの必要条件ではなく、十分条件(注1)でもあります。つまり、どんなものでも(生物でなくても)増えて遺伝する性質があれば進化という現象が起こるということです。

【文章Ⅱ】

人間は増えて遺伝するもの(注2)の末裔(まつひ)ですが、人間の存在は新しい「増えて遺伝するもの」を生み出しました。リチャード・ドーキンスはそれを「①ミーム」と名付けました。「ミーム」とは人間の脳に広がる考え方やアイデアのことを指します。

A ジョークもミームのひとつです。面白いジョークを聞いたら覚えて他の人にも伝えたくなるでしょう。こうしてジョークはたくさん人の脳のなかに増えていきます。もっと面白くなるように改良する人もいます。そうすればジョークは変異し、その変異したジョークがさらに広がっていきます。より面白くなったジョークはより速く広がっていくはず。こうしてジョークも進化することになります。ここで起きているのは、^②生物進化と同じ現象です。ただ、

生物進化と決定的に異なるのは、ミームは人間の脳のなかでしか存在できないところです。したがって、皆が忘れてしまえばミームは簡単に絶滅してしまいます。

ほとんどのミームは長続きしません。すぐにその寿命を終えて、皆の脳のなかから消え去ってしまいます。10年前にどんなジョークが流行^{はや}ったかなんてだれも覚えていないでしょう。

ミームは、「文化」や「芸術」と呼ばれるようになります。B、稀^{まれ}にですが長い間、世代を超えて伝わり、進化し続けるようなミームも存在します。そうした

すべての文化や芸術もジョークと同じようにミームとして人間の脳の中で進化しています。たとえば西洋の美術も、12〜14世紀のゴシック美術、15〜16世紀のルネサンス美術、17世紀のバロック美術といったように、時代を経るにしたがって新しい要素を追加しながら進化してきました。ジョークと異なるのは、その増える能力です。ジョークであれば何年も経てば面白くなくなって、もうみんな忘れてしまいます。次世代に受け渡そうとする人はいなくなるでしょう。しかし、絵画の場合は数百年以上も前から歴史がつながっています。その間ずっと絵画の歴史は（一部のみにだけかもしれませんが）世代を超えて受け渡され、進化し続けています。前の世代を参考にしつつも、そこにはない新しい要素が付け加えられ続けています。増える能力が極めて高いミームだと言えます。

絵画以外にも音楽や演劇でも同じです。さらに映画でも、小説でも、ドラマでも、漫画でもアニメでもビデオゲームでも、さらには科学でも同じです。単にミームとして進化してきた歴史の長さが違うだけです。どの分野にも歴史があり、時代を超えて引き継がれている増える能力の高いミームです。増える能力が高いということは、C、大きな魅力があり、ファンが多いということを意味します。

こうした芸術や文化の驚くべき点は、生物としての人間の生存に対して全く役に立たないところです。実際のところ、どんなに素晴らしい芸術作品でも、映画や小説でも、その作品を見る人の生存や子孫を残す可能性には、ほぼ何の影響も与えないでしょう。D、本来、生殖に費やす

べきだった時間や労力が取られてしまうので、子孫の数を減らしているかもしれません。しかし、それなのにこうした作品は受け取り手に大きな影響を及ぼし、生きがいとなっていることもあるように思います。誰しも寝食を忘れて映画、小説、漫画、ゲームなどに夢中になったことがあるでしょう。生きててよかったと思うくらいに心を動かされることもあるのではないのでしょうか。私も、死ぬまでになんとしても続きが読みたい小説と漫画がいくつかあります。これは生物としては^③おかしな状況です。

（中略）

こうした芸術や文化に対する情熱をなぜ人間が持っているのかはよくわかっていません。芸術はもともと異性に気に入られるための手段として進化したという説がありますが、今やその範疇^{はんちゆう}を超えています。なぜ芸術や文化が性を超えてこんなにながったのかはやはりよくわかりません。ただ、ひとつの可能性として、こうした芸術や文化というミーム自体が私たちの脳に広がりやすいようにうまく進化したということはあるかもしれません。つまり、芸術や文化といった増える能力の高いミームは、人間の脳の中で生きのびやすく、かつ増えやすいように変化しているとい

う可能性です。言い換えると、ミームは腸内細菌のように人間と^④共生しているということです。

こう考えると、芸術や文化的な活動が私たちの生きがいにもなっていることも説明ができます。ミームは **E** なので、必ずより生きのびやすく広がりやすいものが進化します。ミームはただの **F** なので、脳の構造に影響を与えることは難しいかもしれませんが、もともと人間が持っている脳の構造に一番よく適応した形へと進化することはできるはずです。つまり、人間が寝ても覚めてもそのことしか考えられないくらいに魅力を感じたり、他の人にも魅力を伝えたいくなるように進化するはずで。まさに、私たちが夢中になっている文化や芸術（映画、小説、漫画、ゲームなど）に^が該当するのではないのでしょうか。

そして、こうしたミームたちが、私たちに生きがいをもたらしてくれるのも^だ妥当なことです。なぜなら、生きがいをもたらすようなミームほど、そのミームの宿主の人間はなんとか長生きして、そのミームをより魅力的にしたり、多くの人にそのミームを広めることに貢献してくれるはずだからです。ミームの側からすれば優秀な宿主となります。したがって、ミームはどんどん人間にとって、それなしでは生きていけないようなものとなっていくはずで。その意味で私たちはミームと共生しています。人間は脳というミームが存在する場所を提供し、ミームは私たちに生きがいを提供してくれています。相互補完的な関係です。

こうした文化や芸術というミームを維持し発展させていくことは、人間にしかできません。文化や芸術は、人間の持つ複雑な情報処理が可能な脳という器官があることで、初めて生まれて増えることが可能になったものです。まさに人間らしい行為だと言えるでしょう。こうした作品の制作に参加する、あるいは一人のファンとして作り出すサポートをすることによって、私たちは他の生物とは違う生き方ができるかもしれません。

（市橋伯一「増えるものたちの進化生物学」より）

（注1）「十分条件」……「AならばB」が成り立つとき、「AはBであるための十分条件」という。

（注2）「末裔」………子孫。

（注3）「範疇」………同じような性質のものが含まれる範囲。

問一、——線①「ミーム」とありますが、その具体例として適[・]当[・]で[・]な[・]い[・]も[・]の[・]を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、思わず魅^み入^いってしまう絵画。

イ、我を忘れて聴いている音楽。

ウ、親友に教えてもらった映画館。

エ、楽しみながら行う理科実験。

オ、主人公に感情移入してしまう小説。

カ、お気に入りのキャラクター。

問二、

A

D

 にあてはまる言葉として最も適[・]当[・]なものを次から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、むしろ イ、もつとも ウ、しかし エ、なぜなら オ、すなわち カ、たとえば

問三、——線②「生物進化と同じ現象」とありますが、「生物進化」とはどのような「現象」ですか。「

く

」という現象。」に続くように、【文章Ⅰ】から四十八字で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問四、——線③「おかしい状況」とありますが、これはどのような状況ですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、1は【文章Ⅱ】から二十三字で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えること。2は【文章Ⅱ】の内容をふまえ、「人間」・「生きがい」という言葉を使って十五字以上二十五字以内で答えること。

ミームは、

1、二十三字

 が、そのミームに

2、十五字以上二十五字以内

 という状況。

問五、——線④「共生」とありますが、これとはほぼ同じ意味で使われている言葉を【文章Ⅱ】の中から八字で探し、抜き出して答えなさい。

問 六、E・F について、次の各問いに答えなさい。

1、E にあてはまる言葉を【文章Ⅱ】の中から九字で探し、抜き出して答えなさい。

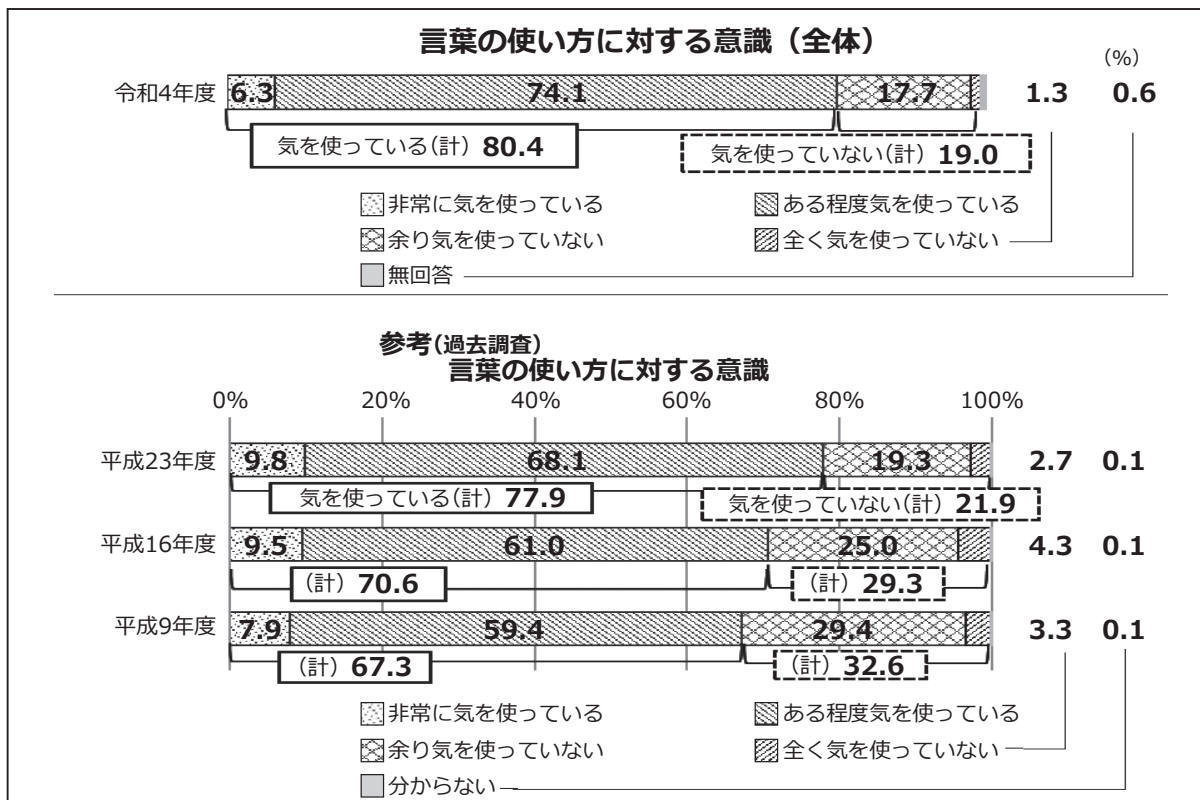
2、F にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、遺伝子 イ、情報 ウ、生物 エ、物質 オ、文化

問 七、【文章Ⅱ】で述べられていることとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

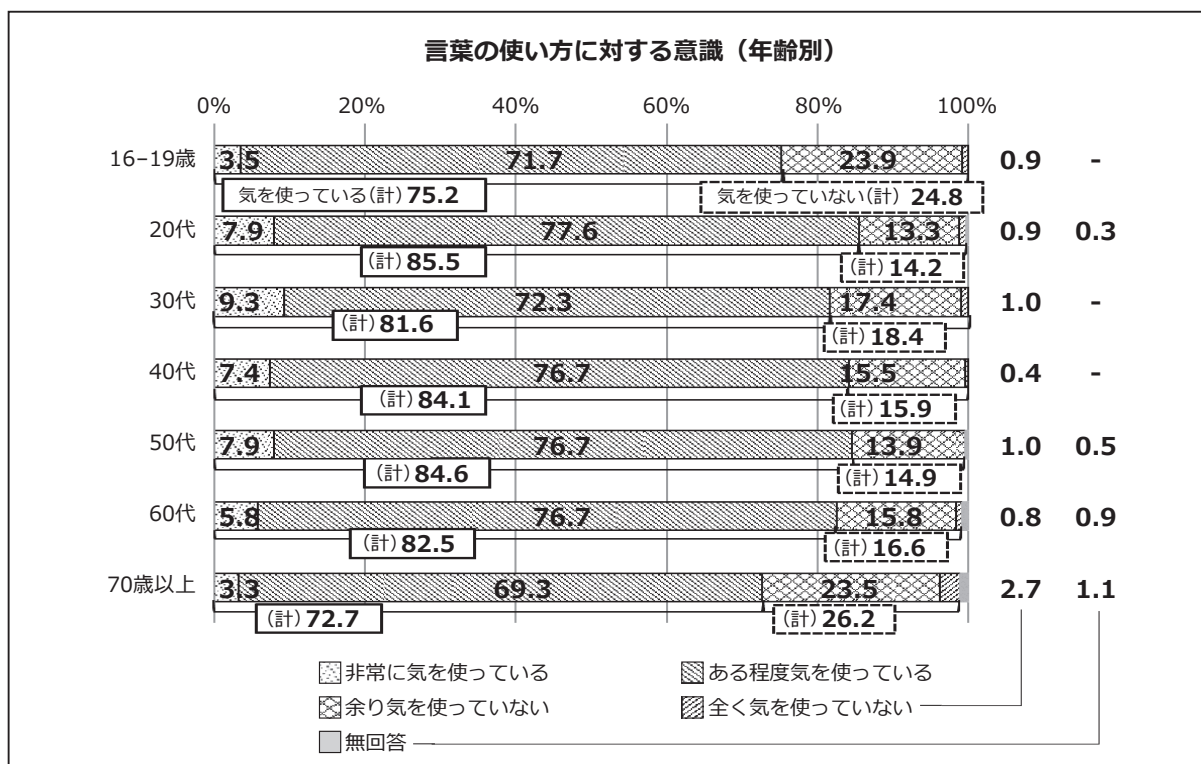
ア、ミームは、人間の脳に広がるものであるが、今後は多くの生物の脳でも広がっていくだろうと期待されている。
イ、ミームは、人間にとつて必要不可欠であり、その存在が失われると、人間は芸術や文化を生み出せなくなる。
ウ、ミームに関わっていくことで、人間は本来の人間らしい生き方ができるようになるかもしれない。
エ、ミームに関わっていくことで、人間は他の生物とは異なる生き方を手に入れる可能性がある。

資料A

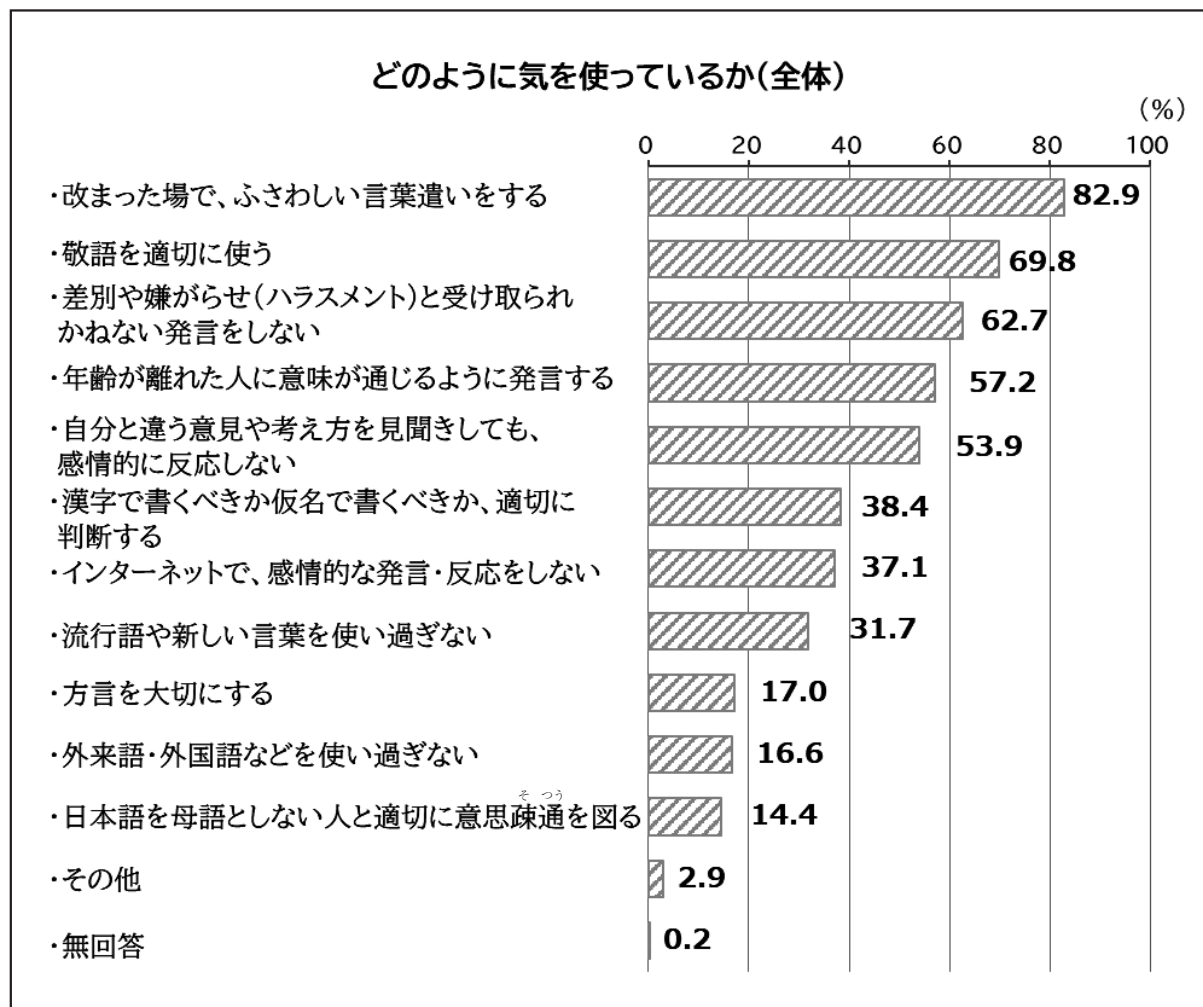


四 次の資料を見て、あとの問いに答えなさい。

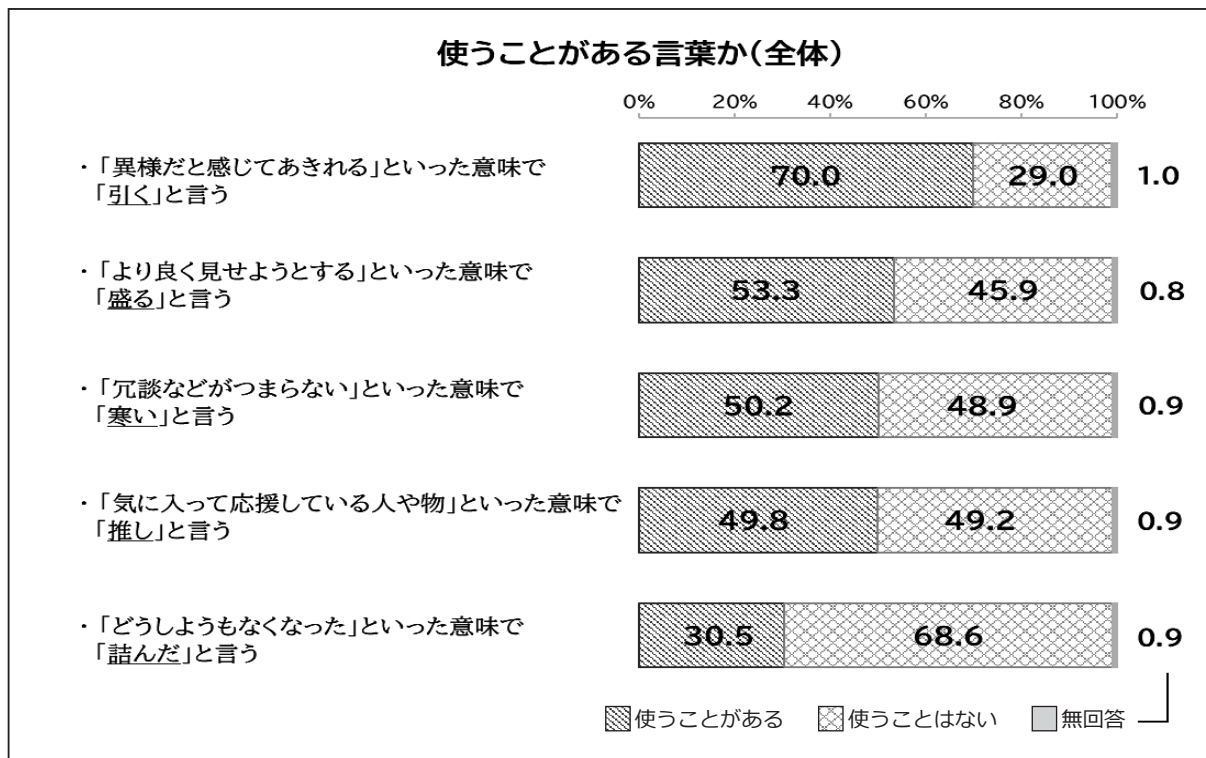
資料B



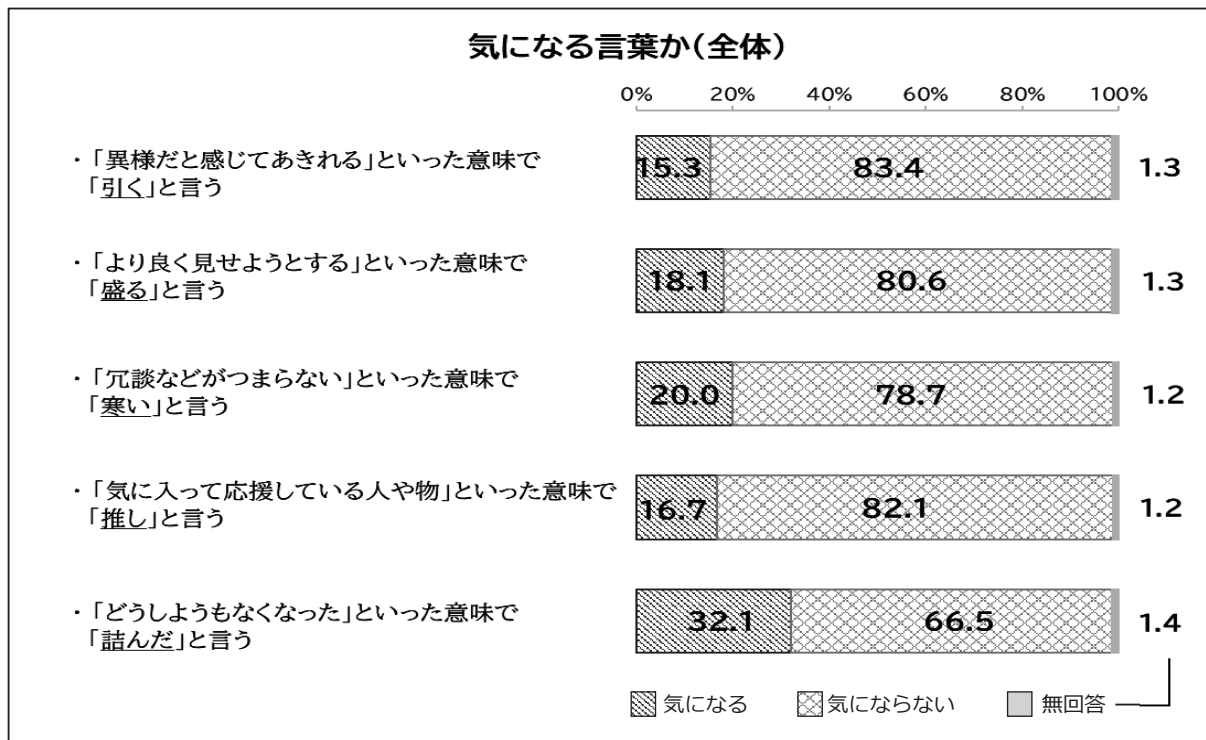
資料C



資料D



資料E



※ 調査した五つの言葉は、^(注)既存の言葉を使った短い言い方で、新しい意味や使い方が辞書に記載されてきたものを取り上げた。
 (注)「既存」……既にあること。

資料F どのように気を使っているか（地域ブロック別、性別、年齢別、性・年齢別）（％）

	数	改まった場で、ふさわしい言葉遣いをする	敬語を適切に使う	差別や嫌がらせ（ハラスメント）と受け取られかねない発言をしない	インターネット（SNS、コメント欄など）で、感情的な発言・反応をしない	流行語や新しい言葉を使い過ぎない	方言を大切にする	外来語・外国語などを使い過ぎない
総 数	2,877	82.9	69.8	62.7	37.1	31.7	17.0	16.6
〔地域ブロック〕								
北海道	124	86.3	66.1	62.1	34.7	33.1	9.7	16.1
東北	193	79.3	61.1	60.6	33.2	31.6	28.0	13.5
関東	986	85.2	72.7	63.5	39.5	32.8	11.8	17.7
北陸	128	82.8	64.8	60.2	33.6	32.8	19.5	16.4
中部	397	84.6	71.5	58.2	36.5	30.5	19.4	17.1
近畿	501	79.8	69.1	64.5	38.1	29.5	16.8	15.2
中国	161	79.5	68.3	65.2	35.4	38.5	16.1	13.0
四国	79	84.8	68.4	69.6	36.7	26.6	21.5	20.3
九州	308	80.2	69.8	63.0	34.7	30.5	25.6	17.5
〔性〕								
男性	1,286	79.7	68.4	62.1	35.8	32.2	17.3	21.1
女性	1,591	85.4	71.0	63.3	38.2	31.4	16.8	12.9
〔年齢〕								
16～19歳	85	88.2	61.2	55.3	62.4	22.4	20.0	5.9
20～29歳	283	86.9	69.6	64.0	57.6	24.4	13.4	5.7
30～39歳	342	88.0	74.6	65.5	52.3	27.2	16.7	12.6
40～49歳	418	87.3	71.1	63.2	46.4	28.5	15.8	14.6
50～59歳	512	88.5	73.6	64.3	40.0	28.5	14.8	13.5
60～69歳	538	82.2	71.2	63.2	27.0	34.2	18.6	18.4
70歳以上	699	71.8	64.1	60.1	18.5	40.5	19.5	26.3
〔性・年齢〕								
男性・16～19歳	38	92.1	57.9	57.9	65.8	18.4	23.7	7.9
20～29歳	107	80.4	66.4	57.9	47.7	23.4	8.4	10.3
30～39歳	170	84.1	74.1	62.4	49.4	25.3	18.8	15.3
40～49歳	193	83.4	65.3	63.7	44.0	25.9	14.5	18.1
50～59歳	234	86.8	73.9	62.4	38.9	30.3	12.4	17.1
60～69歳	235	78.7	69.8	63.4	26.0	34.5	20.4	25.1
70歳以上	309	68.6	64.1	61.5	20.4	44.3	22.0	31.4
女性・16～19歳	47	85.1	63.8	53.2	59.6	25.5	17.0	4.3
20～29歳	176	90.9	71.6	67.6	63.6	25.0	16.5	2.8
30～39歳	172	91.9	75.0	68.6	55.2	29.1	14.5	9.9
40～49歳	225	90.7	76.0	62.7	48.4	30.7	16.9	11.6
50～59歳	278	89.9	73.4	65.8	41.0	27.0	16.9	10.4
60～69歳	303	84.8	72.3	63.0	27.7	34.0	17.2	13.2
70歳以上	390	74.4	64.1	59.0	16.9	37.4	17.4	22.3

資料A～F出典：文化庁 令和4年度「国語に関する世論調査」より作成

資料G

I そうした風潮が見えてきた。

広がる SNS（交流サイト）など言葉を取り巻く環境は大きく変化している。文化や心のよりどころとなる日本語を大切にしながら未来につなきたい。

文化庁が16歳以上を対象にした令和4年度の「国語に関する世論調査」を発表した。

「引く」を「異様だと感じてあきれる」という意味で使うかどうかを聞くと、70%が「使うことがある」と答えた。「より良く見せる」という意味の「盛る」も53.3%、気に入っている人や物を指す「推し」は49.8%だった。

いずれも既存の言葉で、新しい意味や使い方が辞書に載るようになったものだ。

興味深いのは、「他の人が使うのが気になるか」と聞いたところ、いずれも全体の8割以上の人が「気にならない」と答えたことである。テレビやインターネットなど多様なメディアを通じ触れる機会が増えているからだろう。

一方で注目したいのが、国語への意識だ。普段「言葉の使い方に気を使っている」とした人は全体の8割を超えた。世代間でその割合に大きな差はなかった。内容を聞くと、「改まった場で、ふさわしい言葉遣いをする」「敬語を適切に使う」「差別や嫌がらせ（ハラスメント）と受け取られかねない発言をしない」の順に高かった。

敬語や丁寧語を II 使い分ける日本語の豊かな特性が根付いている証拠だ。ハラスメント問題や、ネット上での発言がときに摩擦を生むことへの III もうかがえた。

（出典：「産経新聞」2023年10月5日記事より作成）

（注1）「交流サイト」……人脈づくりや情報交換などに役立てるインターネットのサービスのこと。

（注2）「ネット上」……インターネットを介したやり取りのこと。

問 一、資料A～Fから読み取れることとして適当でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、言葉の使い方に対する意識は、平成の間に行われた調査においては年を追って「気を使っている」と答えた割合が増えている。

イ、言葉の使用に関する気の使い方は、「性・年齢」によって異なった傾向が見られ、特に特定の言葉において異なった気の使い方がなされている。

ウ、言葉の使用に関する気の使い方を地域ブロック別にみると、「敬語を適切に使う」は関東で最も高く、「方言を大切にする」は東北と九州で他の地域より高くなっている。

エ、言葉の使用に関する気の使い方を年齢別にみると、「改まった場で、ふさわしい言葉遣いをする」はすべての年代で他の選択肢の割合を上回っている。

オ、言葉の使用に関する気の使い方のうち、「流行語や新しい言葉を使い過ぎない」・「外来語・外国語などを使い過ぎない」では、性別を問わない場合、年代が上がるにつれておおむね割合が高くなっている。

カ、言葉の使用に関する気の使い方のうち、「インターネット（SNS、コメント欄など）で、感情的な発言・反応をしない」・「流行語や新しい言葉を使い過ぎない」では、「年齢」においても「性・年齢」においても年代が上がるほど割合が高くなっている。

問 二、資料Gは資料A～Eをふまえて書かれた記事です。これについて、次の各問いに答えなさい。

1、

I

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、新語の受け入れに配慮しつつ正しい言葉の使い方を受け継いでいく。

イ、新語は柔軟に受け入れつつ言葉の使い方には気を配る。

ウ、日本語が時代に適応するように言葉の使い方に配慮する。

エ、日本語を豊かにするために使い方を工夫し新語は積極的に受け入れる。

2、Ⅱ にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自分の利益や立場を重視して

イ、自分の利益や立場を優先して

ウ、場や相手を尊重して

エ、場や相手を軽視して

3、Ⅲ にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、公共心

イ、先入観

ウ、嫌悪感^{けんお}

エ、警戒心^{けいかい}

